

[044] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10227>

出版情報：語文研究. 44/45, 1978-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

文学部
教育学部
法学部
経済学部



春日和男教授略歴

- 大正 四年 二月 八日 長野県上伊那郡朝日村赤羽（現在辰野町）に春日政治長男として誕生
- 昭和 十二年 三月 第五高等学校文科甲類卒業
- 昭和 十五年 三月 京都帝国大学文学部国文学科卒業
- 昭和 二十二年 三月 福岡県筑紫中学校（現在県立筑紫丘高等学校）教諭
- 昭和 二十三年 四月 福岡経済専門学校教授
- 昭和 二十四年 三月 福岡商科大学（現在福岡大学）助教授
- 昭和 二十五年 五月 九州大学助教授（第三分校）
- 昭和 二十六年 三月 同（第二分校）
- 昭和 二十八年 四月 九州大学文学部講師（非常勤）
- 昭和 二十九年 七月 九州大学助教授（文学部）
- 昭和 三十七年 三月 九州大学教授（文学部国語学国文学第一講座担当、大学院文学研究科指導教官）
- 昭和 四十三年 七月 九州大学教授（文学部国語学国文学第一講座担当、大学院文学研究科指導教官）
- 昭和 四十六年 九月 スウェーデン国およびフランス国へ出張（ストックホルム大学客員教授）
- 昭和 四十七年 四月 ハ日本語学担当一九七一一一九七二∨その他、昭和四十七年四月帰朝）
- 昭和 五十三年 四月 言語学講座兼任（昭和四十七年十二月まで）
- 昭和 五十三年 四月 停年退官
- 昭和 五十三年 五月 北九州大学教授（文学部国文学科国語学担当）
- 九州大学名誉教授の称号を授与せられる

春日和男教授主要著書論文目録

著 書 名

存在詞に関する研究 — ラ行変格活用語の展開 —

説話の語文 — 古代説話文の研究 —

論 文 題 目

古事記の清濁書分について

現代かなづかいと文法組織

古事記の擬音語

原始象徴語への認識

助動詞「あり」が融合する動機 — 万葉集と宣命から —

助動詞「たり」の形成について — 「てあり」と「たり」 —

毛利本「史記呂后本紀」覚え書

聖語藏御本四末曾有経試読

指定表現の様式 — 発生過程よりの考察 —

「也」字の訓について — 「ぞ」と「なり」の消長 —

「花桜をる少将」における語彙 — 小弓その他 —

下照姫の歌 — 歌格と提示法と —

いはゆる伝聞推定の助動詞「なり」の原形について

元永本古今和歌集の書写に関する一問題

碓氷の坂を越えしだに

「也」字の訓練考

聴覚および視覚による表現

「なり」と「めり」との関係について —

風 間 書 房
桜 楓 社

国語国文一一七号

福岡経専論叢 第一号

同 第三号

福岡商大論叢 第五号

文学論輯 第一号

万 葉 第七号

文学論輯 第二号

訓点語と訓点資料第二号

文学研究 第五十輯

国語国文 第二四六号

文学研究 第五十一輯

文学研究 第五十二輯

国語学 第二十三号

語文研究 第四・五号

万 葉 第十七号

文学研究 第五十四輯

文学研究 第五十六輯

昭和四十三年 七月
昭和五十年 十一月

昭和十六年 四月

昭和二十四年 十月

昭和二十五年 十月

昭和二十七年 五月

昭和二十七年 五月

昭和二十八年 四月

昭和二十九年 三月

昭和二十九年 八月

昭和二十九年 十二月

昭和三十年 二月

昭和三十年 三月

昭和三十年 十二月

昭和三十年 十二月

昭和三十年 十二月

昭和三十年 十二月

昭和三十一年 三月

昭和三十一年 七月

- 指定辞「たり」雑考 — 特に発生と用法と —
 三宝絵詞東大寺切實見
 — 主として関戸家本冊子と観智院本との比較による —
 草仮名による字音表記
 ゴトシといふ語の形態と位相 — 今昔物語集の用例二三 —
 続「三宝絵詞東大寺切」實見 — 字音語の表記について —
 カクノゴトシといふ熟語の訓読性
 — 訓点語と今昔物語集の用例二三 —
 聴覚および視覚による表現
 — 「なり」と「めり」の消長について —
 ラ変活用語の構成
 古事記における「如」字の訓について
 慶長十五年閏書五逆秋（無門関抄）の国語学的研究
 貞享三年書写 — 序 指定辞の様式 —
 「碓氷の坂を越えしだに」統考
 助動詞「けり」の二面性 — 竹岡説に思う —
 「なる」の意味変化 — 文法上許容に関する事項一六の場合 —
 平安時代語の語法 — 助動詞「なり」と「めり」の世界 —
 三宝絵詞東大寺切の研究 — 関戸家本の本文と用字 —
 「今昔」考 — 説話の時制と文体 —
 万葉集における聴覚表現の構文 — 視覚表現との交渉 —
 伝聞推定の助動詞「なり」の周辺
 前田家本日本書異記の性格 — 「師自夏卒之」考 —
 「昔」と「今は昔」 — 「今昔考」補説
 興福寺本日本書異記に見える敬字の訓釈について
 説話文体の効用 — 「今昔考」の終りに —

文学研究 第五十七輯	国語国文 第二九一号	文学研究 第五十八輯	国語国文 第三〇五号	語文研究 第十号	文学研究 第六十輯	国語学 第五十号	文学研究 第六十一輯	語文研究 第十六号	国文学言語と文芸第三十九号	語文研究 第十八号	国語と国文学第三十九・十号	創立四十周年記念論文集	国語国文 第三八三号	沢瀉博士喜寿記念万葉学論叢	国語研究 第九号	文学研究 第六十五輯	語文研究 第二十四号	福田良輔教授退官記念論文集	文学研究 第六十六輯
昭和三十三年 三月	昭和三十三年 十一月	昭和三十四年 三月	昭和三十四年 十一月	昭和三十五年 一月	昭和三十六年 三月	昭和三十七年 九月	昭和三十七年 十二月	昭和三十八年 六月	昭和三十九年 五月	昭和三十九年 八月	昭和三十九年 十月	昭和四十一年 一月	昭和四十一年 七月	昭和四十一年 七月	昭和四十一年 九月	昭和四十二年 三月	昭和四十二年 十月	昭和四十三年 十月	昭和四十四年 三月

「侍り」と「候ふ」の分布より見た
 「法華修法一百座聞書抄」の文体
 伊勢本節用集の一系譜 — 玉里文庫本と竜門文庫一本 —
 慶長十五年聞書 五逆秋（無門閑抄）の国語学的研究（二）
 貞享三年書写
 漢文訓読と終助詞「かし」の問題
 九州大学蔵「金剛頂瑜伽經第二」古点より
 仮名遣ひ以前 — 古筆の表記について —
 万葉集と存在詞 — 上代の形容動詞とガル語尾 —
 説話構文について
 万葉集の末句三題
 三宝絵詞東大寺切追考 — 「おそろ」の活用など —
 関戸家本三宝絵詞東大寺切の本文について
 — 「説話の語文」補正 —
 蘇悉地羯羅經古点の一本より
 On the Development of the Definitive in old
 Japanese (outline)
 Tense and Style in Ancient Japanese Narratives

佐伯梅友博士古稀記念
 国語学論文集
 語文研究 第二十九号
 文学研究 第六十八輯
 語文研究第三十一・三十二号
 訓点語と訓点資料第五十四号
 語文研究 第二十七号
 武蔵野文学第二十二号
 文学研究 第七十二輯
 （創立五十周年記念論文集）
 上代語論集
 大坪教授退官記念国語史論集
 文学研究 第七十四輯
 国語国文 第五一二号
 Bulletin of the Faculty of
 Literature Kyushu Unive
 Bulletin of the Faculty of
 Literature Kyushu Unive (2)

昭和四十四年 十月
 昭和四十五年 十一月
 昭和四十六年 三月
 昭和四十六年 十月
 昭和四十九年 五月
 昭和四十九年 八月
 昭和四十九年 十二月
 昭和五十年 九月
 昭和五十年 十月
 昭和五十一年 五月
 昭和五十二年 三月
 昭和五十二年 四月
 1969. 10
 1968. 3

以上主要なるものみの抄出

春日先生との二十余年

春日和男先生が、停年の故を以て我々の教室を去られてから、すでに二か月である。先生のお部屋の入口にはもうさっそく他の教官の名札が掛っている。毎日その前を通って隣の私の部屋に入るたびに、今なおそのドアの向うで、美しい白髪がまっ直に背をのばされ、端然と書見をなさっているお姿をまざまざと見、ドアをノックすれば、すぐに「はい、はい」と明るく軽やかなお声が返ってくるようだ。清雅とか穩厚という文字は先生のために作られたのか、と思うことが、私にはしばしばあったが、それも、こういう先生のさりげない日常のお姿の印象によるのであった。

しかし清雅・穩厚は、同時にそのまま先生の学問の風姿でもあられるようだ。私はそれを十分に論ずる資格には欠ける人間だが、この印象に狂いはない、と信じてはいるのである。それは御尊父政治先生の血を継がれたものであることもちろんだが、しかしその底には先生の学問に取り組まれる烈しい気魄が秘められていることも、先生を知るすべての人が常に感じ取っていることであろう。先生は、授業の前日には、その下調べのためしばしば徹夜されるという。この一事がすべてを物語っている。

また先生は、「私は人と争ったことがない」と言われた事がある。そして、長い年月の間、私が拝察したところもたしかにその通りであった。声を励まし、あるいは色をなされた先生を、私は嘗て知らない。その事にあまえていつも勝手な事を申し上げていたのは私であり、今にして痛く恥じ入るばかりである。

先生の九州大学御勤務は、延々二十九年に及び、その受講生の数は学科専攻生だけでも四百人に達する。御尊父政治先

生が、大正十五年国語国文学科創設以来、戦前までの教室のいわば生みの親であられたとすれば、御子息の和男先生はその後を受け継がれて、戦後の九大国語国文学科教室の育ての親であられた。われわれの教室の学界に於ける評価は、近年ようやく定まったかに見えるが、それには、父子二代に亘られる春日先生の御力の甚大なるものがある事を今さらに思わざるを得ない。

今、こうしてあとに残された者たち一同、この学恩の万一に報じ奉るせめてもの心意気の一端として、この特集号は編まれた。もとよりささやかなものながら、謹んで先生に献呈させていただきたい。幸いに、御嘉納あらんことを。
なお、最後に、春日先生が今後ますますお元気に、学界に御活躍なさいます事を、心からお祈り申し上げます。

今 井 源 衛